

公益財団法人 小佐野記念財団

第31回 国際交流・国際理解のための
小中学生による作文コンクール



受賞作品集

<小学生の部>

最優秀「ダブル」	1
甲府市舞鶴小学校5年	野中 真里
優 秀「日本に住んでいる外国人の友達」	2
昭和町立西条小学校6年	尾上 遥
佳 作「遠いオーストラリアで出会った人たち 経験したこと」	4
甲府市立舞鶴小学校5年	望月 心晴
佳 作「外国の人のいいところ・文化あいさつ」	6
山梨大学教育学部附属小学校3年	大木 昂

<中学生の部>

最優秀「サッカーを通じて開いた海外へのとびら」	7
甲府市立南西中学校1年	櫻井 秀都
優 秀「『当たり前』が『幸せ』だった」	9
北杜市立甲陵中学校2年	富岡 水
優 秀「国境を越えて」	11
北杜市立甲陵中学校3年	山本 愛友
佳 作「世界と自分を結ぶ特技」	13
北杜市立甲陵中学校3年	白倉 結衣
佳 作「15歳の夏休み」	15
山梨英和中学校3年	中山 美怜
佳 作「私の友達」	17
甲府市立北東中学校1年	中村 知歩
佳 作「肌の色なんて関係ない」	19
北杜市立甲陵中学校1年	小松 日菜

<小学生の部>

最 優 秀

「ダブル」

甲府市舞鶴小学校5年 野中 真里

わたしは「ダブル」です。私の父はタイ人母は日本人です。私はタイで生まれ、小学校2年生までタイで育ちました。

「あなたハーフ?」。これが初めて日本の学校に来た時にお友達に言われた言葉です。私は「ハーフ」という言葉がわかりませんでした。私は家に帰って母に学校での出来事を話しました。すると母は「ハーフってというのは、外国人と日本人の間に生まれた子の事を言うのよ。でもママはハーフだとは思わないよ。ハーフは半分でしょ。でもあなたたちは半分为タイで半分为日本ではないよね。パスポートだってタイと日本2冊あるし、言葉だってタイ語と日本語が両方100パーセント話す事ができるでしょ。お家だって、友達だって両方にいるでしょ。ちっともハーフ(半分)ではないでしょ。むしろあなたたちはダブルって言ったほうがいいんじゃない。」と笑いながら言いました。「なるほど。私はダブルなんだ」。

小学校3年生の3学期にたん任の先生にたのまれて母が国際交流の授業としてタイについてお友達の前で授業をしてくれました。その時母が、タイのきれいな海の写真やおいしい食べ物、めずらしい動物の鳴き声などを紹介するとたちまちお友達は「タイいいなあ。行ってみたいなあ。真里ちゃんいいなあ。」と言いはじめました。私はとてもうれしくなりダブルに生まれて良かったと思いました。

私のしょう来の夢は、女優さんになる事です。私はタイ語も日本語も話す事ができるので、タイで日本について色々紹介したり、日本でタイについて紹介して、少しでもタイと日本が仲良くできたら良いと思います。そのためにももっともっとタイと日本の文化を勉強してみんなに教えてあげられるようになりたいと思います。

言葉やはだの色、国や宗教、住んでいる所がちがっても、私のようなダブルの子供たちがそのちがいを上手に紹介して仲の良い地球人にみんながなれたら良いと思います。そのため何ができるのかこれから考えていきたいです。

「日本に住んでいる外国人の友達」

昭和町立西条小学校6年 尾上 遥

私の家には、毎週金曜日に外国人の女の子がくる。今ではとても仲がよいが、初めて会った時はお互いに苦労した。その時のことはよく覚えている。

彼女は私の妹よりも年下の5才の女の子。彼女はアフリカ出身の黒人で、今は日本に住んでいる。最初はあまり私に近い存在ではなかった。会うきっかけになったのは、お母さん同士の仲が良かったからだ。私のお母さんが、私がピアノが好きだということを彼女のお母さんに話した。それで私が彼女に、ピアノを教えてほしいと頼まれたことが始まりだった。

私は、近所の公園で、彼女に初めて会った。ふだん、黒人は見ないので、私は少し動揺してしまった。また、彼女も何も話しかけてこなかった。結果、その日はなにもしゃべらずに別れた。

そのことがあって、最初はピアノを教えることにやる気だった私も、うまくコミュニケーションがとれるか不安になり、その話を断ろうとした。しかし、なんだかんだで結局、毎週金曜日に私がレッスンをすることになった。

金曜日。学校から帰ってきた私には、たくさんの不安があった。だが、すぐに時間はたって、彼女を保育園へお迎えに行く時間になった。家にきた彼女は、この前とは見た目も性格も全然ちがうように思えた。まず、見た目は、色とりどりのゴムでかみの毛をたばねていた。ドレットヘアというらしい。生まれてはじめて見るしぼり方で、日本っぽくなく、外国を感じた。性格も、とても明るかった。私にも気をゆるして、話すこともできたので、私の不安はなくなった。彼女が家にいるのは約2時間。もちろん2時間もレッスンはせず、5分ぐらいのレッスンで終わり、残りの時間はおやつを食べたり遊んだりしている。妹と遊ぶことが楽しく感じる私は、彼女と遊んでも楽しかった。その日以来、私たちも彼女の家遊びに行くほど仲良くなり、今では、金曜日以外にも遊んでいる。

私は、彼女と出会って、いろいろなことを考えた。「黒人」と「白人」と「黄色人」の差。それはただ見た目の差なのであって、中身は同じなのだということ強く感じた。昔「黒人差別」があったときに、ネルソンマンデラさんが差別をうったえた気持ちがよくわかる。今ではネルソンマンデラ国際デーもでき

たが、今もまだ、ニュースをみると「黒人差別」は根強くある。みんな同じなのに・・・。

ちがいは単に見た目だけ。見た目ですべてを判断するのはよくないと思う。「黒人」とのかべをつくっていきなりわかり合えない人たちは、見た目だけで判断しているのかもしれない。目だけをつかうのではなく、口や耳もつかってたくさん話し、笑いあったら、きっと人間みんな同じなんだとわかるだろう。

この出会いは、私にとってとても貴重なものになった。いろいろな人と知り合うことが自分の考え方を広げてくれた気がする。

彼女は、毎週会うたびに日本語が上手になっていく。ピアノも上達していく。私は、彼女や彼女のお母さんから、アフリカの話やきいたり、みんなで英語のゲームをしたりしている。料理をつくってもらうこともあり、とても楽しい。最近では、海外に行ってみたいとも思う。そして、これからは日本にいる外国人とも、積極的に接していきたい。

「遠いオーストラリアで出会った人たち 経験したこと」

甲府市立舞鶴小学校5年 望月 心晴

昨年、この国際交流作文コンクールで、最優秀賞を頂き、その副賞として海外研修も頂きました。想像もしていなかった賞とごほうびに、びっくりとうれしさを私はおねが、ドッキンドッキンと鳴っていたのを覚えています。色々、行って見たい国が候ほに上がったのですが、最終的に兄が一昨年お世話になったオーストラリアに行って、ホームスティ先の家族にお礼を言おうという事に決定しました。飛行機で9時間以上かけオーストラリアのゴールドコーストに行きました。ホームスティ先のお母さんとホテルで会う約束をしていましたが、兄がメールで約束をしていただけだったので、本当に会えるかみんなドキドキしていました。約束していた時間になり、ホームスティ先のお母さんと弟のイーザンがきてくれました。初めて私は会ったのにすぐに、ギュッとハグをしてくれ、びっくりしました。兄は、会えて少してれていましたがとても嬉しそうでした。母と祖母はなみだが出ていました。後で、「どうしてなみだが出たの？」と聞いたら感しゃの気持ちがいっぱいでなみだが出てきたよと教えてくれました。ホテルから家はとても遠くて高速道路で1時間以上かかる所でした。こんなに遠くから来てくれたんだとみんなで、また感しゃの気持ちでいっぱいになりました。家は、大きくてオシャレで緑がたくさんあり、動物がたくさんいました。引っこし用のダンボールがありました。びっくりした兄が英語で、引っこしするの？と聞くと、イエスと返事がきました。そんな忙しい時におじゃまして迷惑じゃなかったのかな？と思って聞いてみると「心配しないで。大丈夫、大丈夫、カムイン、カムイン」と笑顔でおかえてくれました。兄と再会できとても喜んで、何回も何回もハグをしていました。兄におかえりと言ってくれたそうです。私は日本とのちがいを発見しました。それは家の中もクツで生活する事です。聞いた事はあったけれど、本当だったんだなと思いました。イーザンがコップにオレンジジュースを入れてくれました。初めて見たオレンジジュースでしたが、味は日本とあまり違いがなく、ちょっとこかったけれどとてもおいしかったです。それから家の中を見せてもらいました。「いいなあ。私もここに住んでみたいな。」と思いました。そして、日本から買っていったおみやげをわたしました。とても喜んで、「センキュ、センキュ」と何回も言ってくれました。イーザンとは、おみやげで持って行ったけん玉で、一緒に遊びま

した。お昼も一緒に食べました。春巻きの中にめんが入っている様な物でした。あまりおいしくはなかったです。初めて食べた味でした。ケーキも出してくれましたが、これもまた、あまりおいしくはなかったです。やはり私は、日本の食べ物のほうがおいしいと感じます。思い出話をした後、みんなで犬の散歩に行きました。近くといっても20分程かかりました。緑がいっぱいでとっても素敵なところでした。並んでいる家も日本とは全然違う家ばかり。どの家も庭があって、広くて大きかったです。公園には見た事のない鳥がたくさんいました。お母さんが大きなパンをくれたので、そのパンを鳥にあげました。私は勇気を出して、お母さんに「これ何っていう鳥ですか？」と英語で聞いてみました。通じるかな？とドキドキ。でもちゃんと通じた様で答えてくれました。小さな声しか出なかったので次はもっと大きな声で言おうと思いました。その後は犬と一緒に走りまわったりしました。汗が、すごく出た時、イーザンが「水は、いりますか？」と聞いてくれました。私は、「YES」と元気よく答えられました。とても気持ちがよかったです。みんな、とてもやさしくてまるで家族のようでした。そして時間は、あっと言うまにすぎ、おわかれの時「今度は日本に来てね。」と言ったら「もちろん！」の返事。英語で話すことが少し楽しいと思えて来た時だったので、もっとここにいたいなと思いました。また、絶対会おうと約束して、さよならしました。

まだ全然英語は聞きとれないし、話せないけれど、通じるととてもうれしいなど感じる事が出来ました。英語は今、公文で勉強しています。もっともっと勉強して、早くスラスラと英語が話せるようになりたいです。そして、オーストラリアの人と世界中の人達と、色々な話をしてみたいと思います。世界は、どんなに広いのか見てみたくなりました。

「外国の人のいいところ・文化あいさつ」

山梨大学教育学部附属小学校3年 大木 昂

わたしの友だちには、アメリカのシカゴに住んでいる、レイアちゃんというともだちがいます。いつもはアメリカにいるけど、長い休みになるとあそびに来てくれます。夏休みでは、バレエを見にいったり、ごはんを食べに行きました。バレエのとき、バレエが終わったしゅんかんくちにゆびをいれてピューとしました。日本人のわたしは、はずかしくってできないけど、レイアちゃんはこれがきほんみたいに音を出してとてもびっくりしました。そのときに文化がちがうと思いました。

わたしは、アメリカにもし住んでいたら、レイアちゃんのようにしてみたいです。

そしてレイアちゃんは、とてもフレンドリーです。はじめてあった子でもなかよくできます。わたしの友だちがはじめだまっていると、すかさずレイアちゃんが、「しりとりしよう!」とさそってくれます。たまにしらないかぞくのところへ行って、いっしょにあそぼっと話しかけてしまいます。すると、日本人のおかあさんが、だめでしょとしかります。でもつき会うと元気でえがおのレイアちゃんにもどります。レイアちゃんのかみの色、目の色がちがっても、なかよくなれてすごいと思いました。

お母さんの友だちにオーストラリアから来た人がいます。その人のあいさつはハグやあくしゅです。見て思ったのは文化がちがうとあいさつのしかたまでかわるのがすごかったです。始めはハグしてなにをやってるんだと思ったけど、おかあさんが、「ハグはあいさつなんだよ。」と教えてくれたのでわかりました。

ほかの国では、あいさつがキスだったり、いまのようなハグをする国もあります。気もちわるいとかんじる人もいるけど、そういうあいさつははだなどをさわることであい手の体のぐあいもわかるし、しんらいされているあかしのよなことだとわたしは思いました。

<中学生の部>

最 優 秀

「サッカーを通じて開いた海外へのとびら」

甲府市立南西中学校 1年 櫻井 秀都

自分の国の常識が、他の国でも常識とは限らない。国際理解には、まずその国の文化と触れ合うことが一番だと思う。僕の通っているサッカークラブでは、ボランティア活動に力を入れ、普段利用する駅の掃除をしたり、試合会場となった場所のゴミ拾いを行ったりもする。そのため、韓国遠征に行ったとき、プロチームの試合観戦で子ども達が食べた物を次々と落としている姿を見て、とても驚いた。ゴミを拾おうとしたら、落とせと合図をされた。韓国ではそれが当たり前で、ゴミを掃除する人の仕事を奪ってしまうと、その人の仕事が無くなって収入を得られなくなってしまいうらしい。ゴミを拾うのも、立派な仕事として成り立っていることは、少し衝撃的な事実だった。こういうことは現地に行かなければ分からないことで逆に日本は仕事に困っている人が少ないんだなということも、実感できた。韓国のグラウンドにもゴミが落ちていた。サッカーを愛する子ども達の見本にならなければと僕達はスタッフとゴミを拾った。小学校6年生で行ったカタール遠征では、ハーフタイムに同学年の選手達が全員で祈りをささげていた。マレーシアのチームは、ピッチに入る前にみんな体を清める動作をしていた。海外ではそれぞれ宗教があることは知っていたが、まの当たりにすると、正直自分とのギャップをととても感じた。子どもの頃からここまで徹底しているのかと、そこまで強く信じているものが自分にはあるだろうかと思うと、すごいなあと思った。同時に、これが文化の違いなのかなとも思った。

驚いたことは他にもあった。日本から13時間かけて着いたカタールは、本当に暑かった。暑いのに汗が出ない、焼けつくような暑さ。それなのに、建物の中は冷房がききすぎていて寒い。こんな中でサッカーなんてできるんだろうか？これがアウェイでプレーすることなのかと、少し緊張した。でも、カタールでは午前中と夜はナイターで練習や試合が行われ、実はなかなか快適だった。

ホテルは豪華だし、グラウンドはプロ選手が使うようなきれいに整った芝で、スプリングラーが回り、施設も設備も完璧なほど整っていた。サッカーが盛んで強いイメージがなかったから、これはすごく意外だった。さすが石油王国なんだなあと思い、石油が出るって本当にすごいことだと心から思った。

国際交流には、まず言葉の壁がある。一番それを感じたのは、同じ年の中国人選手たちがサッカーの試合で来日し、わが家へホームステイに来たときだった。英語ならなんとなくでもわかるのに、中国語となるとハードルは高い。相手も全く日本語ができず、片言の英語すらあやしかった。でも一緒にサッカーしたり、トランプをしたりするうちに、距離がグンと縮まり、自然に意思を伝えられるようになっていたから不思議だ。

「足が速いね」「足が速いからモーターっていうあだ名なんだ」「寮生活をしてるから、1年に何回かしか両親に会えない」「お兄ちゃんも同じ寮なんだ」こんな会話を果たして何語でしたか覚えていない。気づいたら、携帯アプリも使わずにお風呂で1時間以上話していた。言葉のハードルは、思ったより案外低かったと感じる。それはぼくらがサッカーでつながっていたからだと思う。スポーツを通じて海外交流をしたことがある人にしかわからない何かがあるのだと思う。

昔、テレビで中国人が日本車を壊したり、日本人の店のガラスを割ったりしている映像を見たことから、ぼくの中国へのイメージはかなり悪かった。でも、彼らとサッカーをして、一緒にね泊まりした3日の間に、ぼくたちは心の友といえるほどの仲になった。細かいことは話さなくても、共にグラウンドで汗を流し、日中混合チームでの試合では同じゴールを目指し、喜んだり悔しがったりはげまし合ったりした。くだらないトランプでムキになって、大笑いして、食たくを囲んで布団を並べてねた。言葉より、一緒に過ごす時間こそが真の国際交流につながると思う。

次に彼らと会うときには、お互いにもっともっとビッグになって、今よりずっと素晴らしい舞台にいたい。そのために今、中学生のぼくがこの日本でできること、やるべきことをていねいに努力しようと思う。

もし、サッカーをしていなかったら行けなかった国にも行ったし、会わなかったら海外の選手とも交流できた。日本と海外の違いも感じたし、逆に同じだと感じることもあった。

スポーツの力はすごい。サッカーがぼくの海外へのとびらを開いてくれた。将来は、プロサッカー選手になって、日本の子供たちのためにぼくが世界のとびらを開いてあげたいと思う。

『当たり前』が『幸せ』だった

北杜市立甲陵中学校 2年 富岡 水

私は今年の夏、スタディツアーでカンボジアに行きました。ツアーに参加した理由は、カンボジアで活動している NGO の仕事に興味を持ち、自分でも何かできないかと思ったからです。カンボジアは、地雷・内戦・子どもの人身売買など、怖いイメージのある発展途上の危険な国ではないかと思っていました。そして日本の子どもとカンボジアの子どもでは、どれだけ普段の生活や環境が違うのかを考えていました。実際に行ってみたカンボジアで印象に残ったできごとがいくつかあったので話したいと思います。

1つ目は、孤児院の子どもたちとの交流です。私は40人の子どもたちと2日間一緒に過ごしました。初日は自分が思っていた以上に緊張していました。しかし緊張で押しつぶされそうな私とは違って、孤児院の子たちは笑顔で日本語を使い、一生懸命自己紹介してくれました。その姿に、私の緊張はどこかへ消え、無事に自己紹介を大きな声ですることができました。孤児院の子どもたちに逆に励まされました。そして私はこの子たちと一緒に、一日中スポーツやゲームをして遊びました。子どもたちはみんな元気で、とてもパワフルでした。施設は想像していたよりも大きくて、綺麗でした。

ここの子どもたちには親がいません。しかも私より幼い子がほとんどです。「親」がないということに、私は勝手に可哀想なイメージを持っていました。孤児院の子たちは確かに恵まれているわけではありませんが、それでも絶え間なく笑顔をいっぱいにして頑張っている子どもたちの姿は、いまを精一杯生きている力強さを感じさせてくれました。

2つ目は売り子の子どもたちのことです。世界遺産のあるシェリムアップでは、観光客を目当てにした子どもたちが路上でお土産を売っています。私も遺跡観光をしている間、何度声をかけられたのでしょうか。すがるような目で、何度見つめられたのでしょうか。道行く人に声をかけられては断られ、また違う人に声をかける。そんなことを一日中、彼らはやっています。そんな姿を見てい

ると商品の1つや2つ、買ってでもいいのではないかと思い始めました。しかし、買ってほしい売り子はその中にいます。一人の売り子から商品を買えば、他の子も集まってくる。当然、私にはその子たち全員から商品を買うことはできません。だからたった一人の売り子にだけお金を払って商品を買ってあげることができませんでした。近寄ってきた売り子にただただ冷たく断ることしかできない自分にとってもない無力さを感じました。生きるために、お金を稼ぐために、必死に路上でお土産を売る子どもがいる、このことは日本とは大きな違いでした。

3つ目は、水上生活の様子から感じたことです。カンボジアには水上生活者が約10万人いるそうです。彼らの家は、日本円にして2万円ほどで建てることができる簡易的なものです。船から見た水上生活の様子は、農村部での暮らしよりもひどいものに見えました。生活用水として使っている水は、土や雨水などでとくかく汚れたもので、私たちが普段使っている透明な水とは全然違います。とても不衛生だし病気にならないかと心配してしまうほど衝撃的でした。水上の家々にも、子どもたちが沢山住んでいます。水上の小学校もあります。学校の近くを通り過ぎるとき、私たちに先生と児童が見えなくなるまでずっと手を振ってくれました。この子たちもこの「水」を飲んでいるんだ。そう思いました。

カンボジアでは、たくさんの子どもの現状を見たり聞いたりし、私は「自分がどれだけ幸せなのか」ということを考えるようになりました。私には、自分を育て、支えてくれる親がいます。私は普段、蛇口をひねったら出てくるとても綺麗な水を使っています。これらのことは私にとって全て当たり前のことですが、カンボジアでは全く当たり前のことではありません。恵まれた幸せなことだったのです。滞在中、貧困で困っているたくさんの子どものを見て私は「この国を助けたい」と思うようになっていきました。小さいうちから親がいない子ども、お金を稼ぐため朝から働いている子ども、休日は町へ遊びには行かず、家の手伝いをしている子ども、家の無い子ども。そんな子どもたちを助けられるような仕事に就きたいと思うようになりました。

NGOのスタッフのみなさんが、「知ることが支援につながる」と言って、私のような中学生にカンボジアの現状やできる支援について教えてくれたことを感謝しています。ツアーでは体験して「知る」ことができたので、いま私にできることをよく考え、将来の勉強に励みたいと思いました。

「国境を越えて」

北杜市立甲陵中学校3年 山本 愛友

6月2日。私は一年ぶりの銀河塾に心を弾ませていた。銀河塾というのは、日韓の交流を深めるために毎年一度、3日間にわたり行われる意見交換会である。毎年、韓国や中国、フィリピンなどから多くの留学生が参加する。私は中学2年生の時に初めて参加をし、今回で2回目であった。今年は去年果たせなかったことに挑戦したかった。それは「積極的に自分から話しかける」という事だ。去年は初めての参加だった事から緊張してしまい、なかなか自分から話を持ち出すことが出来なかった。銀河塾では、『戦時中の国際関係』について学ぶ。そのため、研修中の主な活動は博物館を訪れたり講習を受けたりすることとなる。そして最終日にはいくつかのチームに分かれて「これからの国際関係」についての討論を行うのだ。去年は、この討論の時に固くなってしまい自分らしい意見があまり出せなかった。そのことがすごく悔しかったのだ。そのことから私は、今回の銀河塾では討論を一番楽しみにしていた。

今回の銀河塾は、去年よりも留学生が多く日本人が比較的少なかった。やはり少し怖かった。しかし、留学生の方たちはどんどん話しかけてくれて、そんな私の不安はすぐに吹き飛んでいった。去年参加していた時のことを覚えてくれていた方もいらっしゃって、たくさんの方とお話ができ、また友達になることもできた。私は、銀河塾の、こういう国境を感じさせない雰囲気 genuinely 大好きだ。

そして、楽しみにしていた討論会。昨年と同じ「国境を越えた交流はありうるか。」という題だった。昨年は「国同士の仲が政治的に悪かったとしても、国と人は別。仲良くなるには政治や過去の問題なんて関係ない。それ以前に同じ人間である。」という意見が多く出ていた。実際私もそう思っていた。銀河塾に来るまでは、外国人と話すことに抵抗を感じていた。ろくに話した事もないのに。その原因を、私は知っている。それは国同士の歴史や政治だ。特に日韓の間では古くからの関わりがある分、歴史的に大きな壁があるといえる。そのた

めか、交流を行う際に「韓国人は日本人が嫌いなのではないか」という、いわゆる先入観が出てきてしまうのだ。しかしそれは、国同士の壁をさらに厚くしてしまう。離れた国の人だとしても、同じ人間として接することが大事なのである。『同じ題なんだから、また同じような話し合いになるんだろうな。』私はそう思っていた。しかし、討論が始まるとそんな考えは全く変わった。意見が、去年と全然違ったのだ。『面白い!』心からそう思った。私たちのチームの討論では「過去を消すことは一番いけない」という考えが圧倒的に多かった。交流を行うのであれば、お互いが心の扉を開かなければならない。そのためには互いの過去や歴史を水に流そうとせず、しっかりと学んで理解し、相手に対して思いやりの心を持たなければならない。それが成り立った上で、交流を行う準備ができたと言える。その後からは、焦らずにお互いの友情を築いていくことで、最終的に交流がありうるのだ、と。『確かにそうだな。』と思った。歴史・政治的に壁があったら、それを簡単に忘れることは難しいだろう。昨年とは正反対な考えではあるが、心から賛成できた。

「国境を越えた交流はありうるか。」私は、初めてこの題を目にしたとき、驚いた。あまりにも壮大で、抽象的だったからだ。きっと参加者の誰もがそう思っただろう。それに、きっとこの題に答えなんかない。一人ひとり、それぞれの考えが違うものになる。その1つ1つが答えになるのだ。そして、去年今年と2回の討論で意見が異なっていたのもどちらかが間違っている訳ではない。どちらもこれからの世界を形作る大切な意見である。この討論には1回や2回では収まらないほどの想いが詰まっているのだ。2回目にして、やっとそのことに気付けた気がした。「どうして2回もこの銀河塾に参加しようと思ったのですか。」討論が終わった後、チーム内の韓国メンバーにそう質問された。一言で言ってしまうと初めて行ったとき、楽しかったから。でも、「こうやって色んな外国の方と交流が出来る事ってなかなかないし、学校じゃ学べないことをたくさん学べるからだと思います。」そう、学校に通うだけじゃ分からないことなんて、世の中にたくさんある。2回の銀河塾を通して、本当に多くのことを学べたと思う。銀河塾は私にとって第2の学校ともいえる。

「世界と自分を結ぶ特技」

北杜市立甲陵中学校3年 白倉 結衣

山梨生まれ、山梨育ち、父方と母方の祖父母の家も山梨。県外に出るのは年に数回。生まれてこの方14年、海外旅行の経験なし。ほとんど山梨県から出ない私。自分と外国に接点などないと思っていた。そんな私に外国との接点ができるのは、甲陵中学校に合格した時だ。私は現在、北杜市立甲陵中学校に通っている。この学校では中学3年生の10月に海外語学研修としてオーストラリアに行く。しかも3日間のホームステイがあるのだ。海外経験のある人からすればたかが3日かもしれない。しかし私は一度も外国になど行ったことがない。ホームステイ先のファミリーに自分の英語は通じるのだろうか。そもそも何を話せばいいのだろうか。不安ばかりが頭の中をぐるぐる回る。もちろん、受験を決めた時から覚悟はしていた。でも受験を決めたのは小学6年生の時。語学研修なんてまだまだ先の話だとばかり思っていた。そしていよいよ2年生の後半に差し掛かるあたりで真面目に考え始めたのだ。

ホームステイに必要な書類として、自分の情報を記入するアプリケーションフォームを書いた。そこには氏名、年齢、住所の他に、自己紹介文を書く欄もあった。例には行きたい場所や食べ物の好き嫌い、特技などがあった。今回は自分の特技について書こうと思う。

「あなたの特技は何ですか。」

これは初対面の人に聞くことが多く、また面接で聞かれることもある実に簡単な質問だ。しかし半年前までの私は、この簡単な質問に答えることができなかった。

特技と趣味はよく誤解されがちだ。しかしこの2つには大きな違いがある。趣味は自分の好きなこと。だから得意である必要はない。それに比べ特技は、自分が自信を持っている特別な才能のこと。そう、得意である必要があるのだ。映画鑑賞、読書、料理、裁縫など。私は趣味が多い方だと自分では思っている。だから半年前も今も趣味ならたくさん答えられる。「では特技は？」半年前の自

分は「ない」と答えていた。好きなことはたくさんあっても、それが自信を持って得意だと言えるかという、そうではないのだ。そこで私は1つでも自信の持てることができるようになりたいと思い、ギターを始めたいと考えた。1つ新しいことを始めるとなると、時間もお金も労力もかかる。両親には強く反対された。しかしとうとう私の熱意に押された両親は認めてくれ、私はギターを始めることになった。

それから私の生活は一変した。確かに、勉強や部活に追われながらギターの練習時間を確保するのは大変な事だった。しかし今までとは全く違う、充実した生活になったのである。そしてそのうち自分の身の周りにも変化が起きた。友達がギターの練習に付き合ってくれたり、楽器を習っている友達とお互いの楽器の話をしたり、今ではバンドを組んで1つの曲を弾けるように仲間と練習するまでになったのだ。自分の見える世界も、自分自身も変わった。

そしてオーストラリア語学研修。そこで私はギターの話もしようと思っている。そして海外の方々とも音楽を通じて理解しあえるようになりたい。『音楽は国境を越える』私の音楽の先生が言っていた。私もその通りだと思う。しかし、国境を越えられるものは音楽だけではない。美術も文学もスポーツも全て、国境を越えられるはずだ。もちろんそれらを特技にしている人も多くいる。私の友人は誇れる特技を持った素晴らしい人たちばかりだ。そんな友人たちを、私はつい両親に自慢してしまう。自分のことでもないのに。ただ友人が特技を生かして活躍している姿を多くの人に見てもらいたいのである。自分の友人はこんなにすごいことができるのだ、と。私も友人たちに負けず、自慢したくなるような人間になれるよう日々努力していきたいと思う。

言葉以外で唯一、世界中の人と繋がることのできるのが特技である。特技1つで国際交流ができるのだ。自分の得意なこと、それはおそらく自分の好きなことでもあるのだろう。先ほどの趣味と特技の説明で使ったのは辞書の言葉であったため、今の私の発言とは少し異なる。しかし私は趣味を極めたものが特技だと考える。好きでなければ、得意になるまでそのことを続けられないからだ。だから自分の好きなことで世界中と関りが持てるなんて嬉しい限りだと思う。

この質問、あなたは答えられるだろうか。「あなたの特技は何ですか？」今なら自信を持って答えられる。「私の特技はギターを弾くことです」と。

自分に得意なことは何もないと思っているあなた。

あなたも国境を越える特技を持ってみてはいかがだろうか。

「15歳の夏休み」

山梨英和中学校3年 中山 美怜

「Hello」「Nice to meet you」

ホストファミリーとの出会いは、この会話から始まった。夏休み、私は17日間のカナダ研修に参加した。英語の授業は好きだが、特別英会話が上手なわけではない。海外へ行くのは初めてだ。そんな私がカナダ研修の説明会に参加して、学校の友達と2人で同じ家にホームステイ出来るということもあり、全く不安を感じることなく参加することを決めた。

出発の1週間前、ホームステイする家族の情報とルームメイトが発表された。仲の良い友達と一緒になれたらいいなあ、と都合の良いことばかり願っていた。一人一人ホームステイ先の情報が渡された。そして私の順番が来た。「中山さんは今回、一人でのホームステイになります。頑張ってくださいね。」と先生から声をかけられた。衝撃だった。25人の参加者だと誰かが一人になることは分かっていたが、高校生もいるし、まさか自分が一人になるなんて1ミリも考えてはいなかった。ホームステイする家族の情報を見ながら、大丈夫かなあ私、と初めて不安になった。と同時に本当にカナダにホームステイするんだという覚悟が少しずつ出来ていった気がする。それから出発するまでの1週間は自分が使うと思われる単語や、会話を毎日調べた。調べれば調べるほど、会話が出来ず困っている自分の姿が頭に浮かんでくる。そんな時は「大丈夫」と自分に言い聞かせ、必死にノートに書き込んでいった。

私を受け入れてくれるホームステイ先は、カナダのバンクーバーからフェリーで1時間半くらいのバンクーバー島のナナイモというある場所にあるアールさんファミリーだ。お世話になるホストファミリーは、お父さん、お母さん、11歳、8歳、4歳の男の子がいる家庭だった。

家族皆がとても優しくて接してくれた。でも文化の違いや生活習慣など戸惑うことも正直あった。うまく伝わらない言葉はジェスチャーや、単語で伝えた。早くて聞きとれなかった言葉も3日目くらいから少しずつ聞き取れる単語が増

えていった。わからない言葉は iPad を使って調べ、毎日夜遅くまでノートにメモした。また、次の日に話せそうな話題を考え、英語で会話するのをイメージしてから寝るようにした。そんな私にホストマザーはいつも笑顔で思いやりをもって優しく気遣ってくれた。ご飯やお味噌汁などの日本食を作ってくれた。私が学校に行っている間にTシャツにアイロンもかけてくれた。毎日学校への送り迎えをしてくれ、夜には色々な場所に連れて行ってくれた。私が聞き取れない単語や、教会での話などは私専用のノートを用意して、スペルを書いて教えてくれた。子供達も毎日たくさん話しかけてくれた。それは下に兄弟がいない私にとって本当に嬉しいことだった。

ホームステイから1週間が経った8月8日、私はカナダで15歳の誕生日を迎えた。私のために家族皆で部屋の飾り付けをしてくれて、手作りのケーキでバースデーパーティーを開いてくれた。ホストファミリーの優しさに、感謝で胸がいっぱいになった。と同時に、もっともっと感謝の気持ちを伝えたいのに、今の私の英語力では上手く言葉に出来ない、という悔しい思いもした。その時、「自分の気持ちを日本語と同じように英語で伝えられるようにしたい」と強く思った。

たくさんの優しさに恵まれて毎日が本当に充実していて、あっという間に17日間のホームステイは過ぎていった。最後の夜、家族一人一人に感謝の気持ちを手紙に書き、カナダ・ナナイモから帰国した。

私は今、山梨県の甲府市に住んでいる。帰国した翌朝、母から「おはよう」と言われた。「あっ、日本語だ」と思った。カナダでの出来事や、今思っていることなどがどんどん言葉になって溢れ出る。そのまま会話になる。今伝えたいことが伝えられる。そんな当たり前のことが英語では簡単でなかった。iPadを使わずに、日本語と同じくらい英語を話す事ができたら、もっとたくさんの会話が出来たのに。もっと自分らしい言葉で感謝の気持ちを伝えられたのに、という思いが込み上げてきた。そう考えた時、今の私に出来ることはやっぱり勉強するしかないと思った。もっともっと単語を覚えて語彙を増やそう。そしてホストファミリーからもらった、たくさんの優しさと思いやりを見習い、海外から来て困っている人を見かけたら、自分から笑顔で声をかけてみよう。

時間はかかるかもしれないが、iPadの辞書機能を使わずに会話が出来るようになったその時、ナナイモのホストファミリーに必ずまた会いに行く。そう心に決めた夏休みだった。

「私の友達」

甲府市立北東中学校 1年 中村 知歩

私には忘れられない友達がいる。紛争地域から来た私よりも背が低くて宝石のような青い目をしている女の子だ。彼女は、小学3年生の時に私の学年に転入してきた。驚くべきことに日本語を全くしゃべる事が出来ない。しかし彼女はどんな人とも仲良くなれる事、そして平和の素晴らしさを教えてくれた。

彼女が学校に転入してくると知った時、クラスのみんなは外国からの転入生にワクワクしていた。しかし、日本語がしゃべれないのではコミュニケーションがとれない。実際、転入する前に放課後彼女が遊びに来ていて、近くの男子にちょっかいを出し騒動になった。私を含め、何人かは彼女がクラスになじめるかどうか心配していた。しかし、彼女は私の心配とは裏腹にすぐにクラスになじんでいった。私達が話しかけると顔がひきつる事も無く、笑顔で嬉しそうに向こうの言葉で返してくれる。「言語が違ってても伝わる事ってあるんだ」という事が分かった私達は気軽に話すことが出来た。勿論、伝わらないときもあった。ある友達は彼女に何か注意した時すり傷を負ってしまった。しかし周りに叱られるとそのようなことはしなくなった。また「おはよう」と言えば元気に返してくれたし、名前を言うと手を振ってくれたりもした。

また、彼女は明るい心の持ち主だ。特に休み時間は一番輝いていた。私は遊具で遊ぶ彼女の姿が印象に残っている。友達と一緒に彼女のところに行くと笑顔で仲間に入れてくれた。すべり台だとすべったらもう1回、すべったらもう1回と何回もすべり続ける。キラキラの笑顔で夢中になって遊ぶので、彼女といると何だか楽しかった。みんなの妹的存在だった。さらに彼女は私達をよく笑わせてくれた。例えば隣に座しているとほっぺを引っ張ってくる。すると変顔で遊び始めて、こちらまで笑いたくなってしまう。またある日は彼女が顔を手でおおってしまい、何が起きているのか分からない私は泣いてしまったのかなと思う。しかし友達が彼女の手をどかしてみるとそこには満面の笑み。思わず吹いてしまった。

彼女は本当に元気いっぱいだった。そして特におしゃべりができる訳でもないのになぜか一緒にいても楽しかった。彼女がいるだけで場の雰囲気明るくなる。まるで小さな太陽のようだった。

しかし、私は一度だけそんな彼女らしくない姿を見たことがある。それは運動会の練習での出来事だ。私達は校庭で競技練習を見ていた。準備が整い、先生が「位置に着いて。ヨーイ」「パンッ」とスターターを鳴らした瞬間、近くに居た彼女が体を丸めてすわりこんだ。険しく、真剣な眼差しを向けて周りにしゃがぶように指示をしている。私はもうどうすればいいのか分からず呆然と立ち尽くしていた。するとすぐに先生が駆け付けて彼女を隅の方へ優しく連れて行った。しばらくすると奥の方から安心したのか泣いている声が聞こえてきた。ほんの一瞬の出来事だった。私はその時初めて彼女が紛争を体験したという事実を実感した。彼女が紛争地域から来たなんて事は前から知っていた。しかし、あまりにも明るくかわいらしい彼女のイメージと、報道で見る家々は焼け、人は無くなり、銃弾が飛び交う紛争のイメージは掛け離れていたのだ。ショックであまりにも衝撃的な出来事だった。その日の練習は心が落ち着かなかった。しかし、当日になると彼女はスターターの音に見向きもしなかった。ここが安全だという事を理解してくれたのだろう。とても安心した。

彼女は2年も経たないうちに家の都合で県外へ行ってしまった。最後まで本当に会話出来ないまま終わってしまった。しかし、彼女は沢山の思い出を残していった。そしてその中で、2つの事を教えてくれた。1つは「どんな人とも友達になれる」という事。同じ言語を話せなくてもお互い仲良くなりたいという気持ちがあれば友達になることができる。だから私は見聞だけで人を判断しないようになった。そして「声かけにくそうな人だな。」と思っても自分から声をかけられるようになった。もう1つは「平和の大切さ」だ。あの時3年生だった私達に彼女は戦争の恐ろしさを教えてくれた。そして戦争についての知識がついた今、改めて彼女がどれほど辛い思いをしたかが苦しいほどに分かった。もう彼女に痛く、悲しく、怖い思いはして欲しくない。そしてそのような思いを持つ人が一人もいない世の中になって欲しい。心から願う。大変なこともあったが、私は彼女と友達になれて本当に良かった。出会えたことに心から感謝したい。

「肌の色なんて関係ない」

北杜市立甲陵中学校 1年 小松 日菜

「日本へようこそ。」

日の丸とザンビアの国旗を両手に持ちながら言う私達。目の前に停まったバスから、私達と同じぐらいの歳の子供が、7、8人出てきました。私はその時の情景を、今でもよく覚えています。バスから出てきたのは、肌が黒く、少しがっちりした体つきの、初めて会う黒人の友達でした。

私の通っていた小学校では、去年、1年間を通してアメリカやシリア、ザンビアの方々と、国際交流をしていました。世界では今、何が起きているのか、自分には何ができるのか。世界のことについて深く知り、考えることのできた、とてもいい機会でした。

その日は、国際交流の一環として、私の通う小学校にザンビアから小学生が来てくれました。とても長い時間の移動だったと思うのに、疲れた様子ひとつ見せず、逆に、きらきらと目を輝やかせながら、両脇に立って旗を振る私達の真ん中を歩いていきました。テレビや写真でしか肌の黒い人を見たことなかった私は、その姿に釘付けになってしまいました。周りの友人たちもそんな様子で、珍しい物を見たような顔になっていました。

最初に、ザンビアの小学生と給食を食べました。私は、「日本の給食は口に合うだろうか・・・。」とずっと心配していましたが、「とてもおいしい。」と言って食べてくれたので、とてもほっとしたのを覚えています。

午後は、ザンビアの小学生と、日本の文化を通して交流しました。習字、お琴、けん玉をやったのですが、ザンビアの小学生は、上達がとても早く、びっくりしました。特に習字で、「夢」という一文字を書いてもらったのですが、日本人でも難しいあの筆の穂先を上手に使い、とてもきれいな線で、「夢」と書いてくれました。ほめると、嬉しそうに笑ってくれました。その笑顔は、私達と何も変わらない、笑顔でした。

お別れの時、ザンビアの小学生は、何度もお礼を言っていました。また日本

に来たい、とも言ってくれました。バスが空港に向けて出発する時、最初に感じた肌の色への違和感は、きれいさっぱりなくなっていました。逆に、肌の色のことを気にする人はおかしい、と思うようになっていました。

以前、「白人警官が黒人の男の人を撃ち殺した」というニュースを見ました。黒人男性は、特に何もしていないのに撃たれてしまったそうです。私は、中立な立場にいないといけない警官が、こんなひどいことをするなんて、と、深い憤りを感じました。それと共に、まだ黒人を差別する人が、風習があるのか、と、おどろきました。国際交流を終えて、黒人を差別する、ということへの怒りは、以前よりも大きくふくらみました。ただ、肌の色が違うだけなのに。私達と何等変わらない人間なのに……。国際交流を通して、私は、「差別はおかしい。肌の色は関係ない。」と、声を大にして世界に伝えたいと思うようになりました。

国際交流を通して、私は、たくさんの大切なものに気づきました。だから、まだ世界を知らない日本の子供達にも、私のような体験をしてほしいと強く思います。本当に温かいザンビアの人達の人からにふれることのできた国際交流の経験は、私にとって、宝物です。